

ジュニアスポーツ教育学科の設立

～ジュニアスポーツ教育学科の設立までの歩み～

但 尾 哲 哉

大学が各学科にコースを設ける

本学では、体系的に学ぶ体制を整えるために各学科にコース制度を設けた。その中で児童教育学科では、生涯体育・スポーツコースを設置した。器械運動、ボール運動、身体表現を中心とした教科体育の充実と、生涯スポーツとして、テニス、ゴルフ、ニュースポーツ、スポーツプログラム（トップアスリートによるリレー講座）などの授業を新設し対応してきた。

生涯体育・スポーツコースの立ち上げ

小学校においても「将来的には、体育授業を専科が対応する時が来るのではないか」と睨んだ中での展開であった。また一方で、高度経済成長期から日本の生活体系に変化が生まれ、利便性を追い求めた結果多くの余暇時間を得られる時代となった。その反面、生活の中での身体を使った労働が減少し運動量が不足する中、さらに食文化にも変化がみられ欧米化した。すなわちカロリーを消費する身体活動が減少し、高カロリーの食事が多く好まれるようになり、消費と摂取のバランスが崩れはじめた。

生涯体育・スポーツコースでは、体育授業の得意な先生が、自らが運動を楽しめる子どもを育成することにより、運動不足の子どもを、しいては大人になっても運動・スポーツに親しめる資質を有した者を育成することを目指した。

生涯体育・スポーツコースの足跡

本コースより多くの学生が、小学校教諭、幼稚園教諭、また社会体育で活躍をしてくれている。コース設立時の思いとは異なり、専科として体育

授業を担当する様相はないが「子どもの体力低下」問題等から、体育授業の見直しがされている。

本コースの卒業生には、体育授業の課題に積極的に取り組んでくれることに期待をしたい。

生涯体育・スポーツ研究会の発足

生涯スポーツのあり方を考える上で、故井関眞欣先生（神戸親和女子大学）溝畑寛治先生（関西大学）平木宏児先生（追手門学院大学）の先生方を筆頭に「生涯体育・スポーツ研究会」を発足した。体育・スポーツを「歴史」「学校体育」「社会体育」「子どもを取り巻く環境」「子どもの運動・遊び」「スポーツの国際状況」「競技スポーツ」等の視点から研究を進めた。その成果として、本会より大学における講義用の教科書として「体育を追究する」を発刊し多くの学生に活用された。

尚、研究会発足当時の事務は、故井関眞欣先生の研究室に置いた。

新学科の構想

さらに「子どもの、あそび・運動・スポーツ」などの環境を考える機会が研究会だけではなく、本学児童教育学科の先生方からも課題として挙げられてきた。空間・仲間・時間の3つの間が減少してきた問題等からである。

これらのことから、新たにスポーツ教育を中心とした新学科構想が立ち上がり、現実化に向け、文部科学省への認可申請の関係から急ピッチに事務作業が進められた。学科名の由来は、幼児期、児童期のスポーツ教育を中心である事を外さないとして、あえてスポーツ科学、健康スポーツなどの名前を避けた。さらに、本学は通信教育学部を

併設しており、生涯体育・スポーツコースの立ち上げの思いを实らせるように、積極的に通信での小学校教諭、幼稚園教諭の免許取得を推進し、学科名もジュニアスポーツ教育学科とし新学科を発足した。文部科学省からは、児童教育学科、生涯体育・スポーツコースの発展的な位置づけとし、認可された。

ジュニアスポーツ教育学科の誕生

平成20年ジュニアスポーツ教育学科新設にあたり、児童教育学科から横山ひろみ先生と但尾が、総合文化学科から酒井純先生が移籍、また以前から本学の非常勤講師、水泳実習、スキー実習で所縁のあった池川哲史先生、木内真弘先生に着任頂き、さらに、新規に平尾剛先生、葦原摩耶子先生に着任頂いた。合同研究室事務には、植田佳代さんに移動頂き7人体制でスタートした。この年に何より気がかりであったのは、学生募集である。開設年度に定員割れなどが起きたらと、苦悩していたことを鮮明に記憶している。平成21年に加藤寛先生、平成23年には、齋藤正俊先生、杉山真人先生に着任頂き、長年お世話になった横山ひろみ先生がこの年に福祉臨床学科へ移籍、平成24年に酒井純先生が総合文化学科に戻られた。合同研究室は平成22年より23年12月まで田中友加里さんに、平成25年に浅井麻美さんに勤務頂き現在のスタッフに至っている。

ジュニアスポーツ教育学科が担う事

運動が苦手、運動が嫌い、それに伴い運動離れが、子どものスポーツ環境で課題の1つとして挙げられる。

また、競技スポーツにおいては、勝利至上主義に走りすぎ、そこで発生する問題にいかに向き合うか。特に子どものスポーツにおいて、これらの問題にジュニアスポーツ教育学科として、どのようなメッセージを送り、具体的な指導論の構築と、それを展開する指導者の育成も急務であり責務と考える。

今後は、世界を教科書にグローバルなスポーツ

に対する感覚と、スポーツ教育の在り方を学ぶ機会も必要であると考えます。

御礼

手探りでスタートした新学科でありましたが、本学教職員の皆さま、学園法人、親和中学校、親和女子高等学校、ご縁多い高等学校の先生方等のご理解とご協力を得て完成年度を迎える事ができました。心より感謝致します。

お陰さまで1期生、2期生共に就職状況も良く、特筆すべきは毎年小学校の教員採用試験に現役で複数名が合格してくれています。今年は（平成25年）兵庫県の高等学校、保健体育教員採用試験に1期生が合格してくれました。合格者の平均年齢が約27歳と言う厳しい状況の中で頑張ってくれました。

開設から学科長の大役を仰せつかり、皆様にはご迷惑をかけながら何とか責任を果たせたかと感じております。

さらなるジュニアスポーツ教育学科の発展は、木内真弘学科長を中心として皆様方の協力を得ながら、教職員、学生と共に進んで参ります。

本当に、有り難うございました。この場を、お借りして御礼申し上げます。